

並河靖之 なわかつゆき 明治二十九年帝室技芸員任命

《四季花鳥図花瓶》 一点

明治三十二年（一八九九）有線七宝 径二五・〇、高三六・〇







背面

東京の濤川惣助が無線七宝に秀でていたのに対して、京都の並河靖之（一八四五～一九二七）は花鳥画に見られる繊細な描写、色鮮やかな色彩を表現するのに適した有線七宝の大家だった。小型の花瓶や香炉、苜箱などに精緻な有線七宝をほどこすことで少数生産に徹する制作姿勢を貫いた並河にとって、本作は寸法、釉薬、意匠のそれぞれの点でパリ万国博覧会出品を意識して新機軸に挑戦したものであった。

本作を覆う黒色透明釉は並河が創始したと伝えられるもので、漆の艶を思わせる透明感のある光沢を伴った深い黒色が特徴である。この黒色透明釉を背景にすることによって、桜と紅葉を主体とした四季折々の草木や花々が相殺されることなく色鮮やかに浮かび上がる。この洗練された図案は並河作品の専属下絵師として活動した中原哲泉によるもので、一八九三年シカゴ万国博覧会出品作である「七宝菊唐草花瓶（東京国立博物館蔵）」に見られるような伝統的な文様構成から、写実性の強い絵画的な花鳥図へと大胆な変貌を見せている。本作では日本画独特の筆意を七宝で表現するに当たって、釉薬の区画となる金属線に肥瘦をつける工夫が凝らされている。また目立たない部分であるが、通常では釉薬が定着しにくい口縁部に金属製の覆輪が取り付けられるのに対して、本作ではあえて無覆輪としている点も見所である。これには当初、口縁部は無覆輪で制作する仕様を提出していたにも関わらず、完成間際に不都合が生じ覆輪を取り付けることを申し出たが、監督者である宮内省調度局がそれを容れず、結局、当初の仕様通り無覆輪で仕上げることとなったという経緯がある。しかしながら、その結果、当時の七宝としては独創的な作品となった。

並河靖之は川越藩士の家に生まれ、幼くして青蓮院宮侍臣・並河靖全の養子となり伏見宮近侍などを務めた。維新後、桃井英升より尾張七宝の技術を修得して七宝製造業に転じた。内外の博覧会で受賞を重ねて京都を代表する七宝家となり、明治二十九年（一八九六）に帝室技芸員に任命された。







- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

皇室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 47

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十年七月十九日発行

© 2008 The Museum of the Imperial Collections